

「知的わくわく磁性流体モデル」を大学と中学校が協働で実現し、
科学のわく組を動かせる次代理系人材を育成する

令和8年度第1日目 2026年6月28日(日)

三重大学 鈴木紀之先生「昆虫生態学の研究とそれを伝えること」

「すごい進化ラジオというポッドキャストを聴いてきてください」「え！私リスナーだ。講師で来てくださるの？」「ポッドキャストって何？」鈴木先生は、大学の先生でもあります。作家活動やYouTube、ポッドキャストなども活用しながら学ぶことの楽しさを発信されています。令和8年度の講座は、鈴木紀之先生を講師にお招きしました。いわゆる昆虫少年だった鈴木先生は、チョウの自由研究に取り組んでいらっしゃったそう。



「昆虫採集」は、独自の文化であると語られました。世界的に見ると、海外（特に欧米）では、虫は「害虫」か「研究対象（標本）」として扱われることが多く、一般の子供たちが日常的に網を持って虫を追いかけたり、家でペットのように飼育したりする光景はかなり珍しいそうです。その延長線上に今の生活（仕事）があるそうです。また、YouTuberのヒカキンさんを例にして、「好きなことで生きていく」という言葉をご紹介くださいました。



資源競争に強く、エサが豊富な場所を牛耳る「勝ち組」のナミテントウ。一方で、動きが素早く栄養価も低いマツオオアブラムシをわざわざ食べる「負け組」のクリサキテントウ。一見、クリサキテントウの選択は不合理で、生存に不利なように思えます。

しかし、その謎を解き明かす鍵は「繁殖干渉（性のミスマッチによる負の効果）」にありました。ナミテントウと同じ環境にいと、激しい交尾行動の干渉を受けて繁殖を阻まれてしまう。だからこそ、あえてライバルのいない過酷なマツの木へと引きこもる道を選んだのだと考えられます。なぜなら、ナミテントウという邪魔者がいない地域では、彼らは本来の「ジェネラリスト（何でも食べる

汎用種）」としての姿をのびのびと発揮します。この話、妙に納得できました。それはなぜかと考えると、ナミテントウとクリサキテントウを小さなシャーレに入れて繁殖行動を観察したり、クリサキテントウだけの場所を観察に行ったりと、自分の説を実証するためのさまざまな「手続き」を踏まえた上でのお話だったからです。

MMP（マイミニポッドキャスト）？



鈴木先生は「研究をすること」と「他者に伝えること」は、決して切り離されたものではなく、車輪の両輪のように同時に進むべきものだとお考えです。鈴木先生が大学で学生たちに教えるのも、それが巡り巡って自身の研究を深め、大学生自身の成長に繋がるという確信があるからだと言います。余った時間で伝えるのではない、命を吹き込んだ自らのストーリーを主体的に発信していくことの価値が受講生たちへと投げかけられました。

30秒という限られた時間の中で、話し手と聞き手を交互に演じる受講生たちの教室は、一気に熱を帯びました。「ゆっくり喋るより、テンションを高め、気合いを入れて演じてごらん」という鈴木先生の言葉に背中を押され、最初は喋ることにドキドキしていた受講生たちも、次第に必死になって「どうすれば自分の問いが相手に伝わるか」を考え始めました。対談形式のポッドキャストを体験する中で、受講生たちは「聞き手の存在が、話し手の新しい側面を引き出す」というリスペクトの大切さを実感できたと思います。相手の言葉を傾聴し、受容し、応答する中で、考えがより深まる経験は、3月のポスター発表と同じです。このMMPを通して、3月のイメージがより深まったのではないのでしょうか。



<受講生の振り返り>「今まで伝える方法はポスターやスライドしかないと思っていただけ、それ自体が型にはまっていたのだと知りました。ミニポッドキャストを通して応答があると話が展開しやすかったし、主体的に行動することで新たな気づきにつながりました。班のみんなと一気に仲が深まったこの小さな一歩が、今後の研究に大きな利益をもたらす『バタフライエフェクト』になるんだと感じています」